

第9回トウキョウサンショウウオ シンポジウム

2007年2月24日(土)

東京都立多摩社会教育会館 301・302 研修室

所在地 〒190-8543 立川市錦町 6-3-1 (東京都多摩教育センター内)

電話：042-524-7950 FAX：042-522-0719

1999年より開催されてきたトウキョウサンショウウオ・シンポジウムは、毎年全国より多数の研究者・保全活動家・ファンが集まって情報交換できる貴重な場として回を重ね、今年でとうとう9回目をむかえました。今回は、アライグマ・アメリカザリガニ・ウシガエルなどの外来種がサンショウウオでも生存の脅威となっていますが、沖縄や小笠原で外来種の問題に長年取り組んでいる専門家によるこの問題への具体的な取り組みや、非繁殖期に捕獲・発見が困難なため、十分な情報が得られていなかったサンショウウオの食性を一年にわたって詳細に調べた結果を紹介してもらう予定です。また、昨年に引き続き多摩地区のサンショウウオ類の生息状況の近況を報告してもらい、情報・意見交換を行いたいと思います。ひとりでも多くの方の参加を期待しています。

主催／トウキョウサンショウウオ研究会

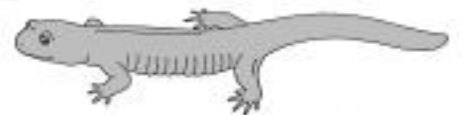
事務局(川上洋一)：東京都あきる野市平沢 473-6 Tel&FAX 042-550-0265

問い合わせ先：草野(首都大・理・生物) Tel 042-677-1111 (内線 3761)

<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~tamo/salamander/index.html>

プログラム

- 13:00 開場
- 13:20 開会 (司会：塩谷暢生)
- 13:30 講演 戸田光彦(自然環境研究センター)「**両生類・爬虫類における外来生物問題**」
- 14:10 講演 渡部祐子(東京都大田区)「**カスミサンショウウオの食性**」
- 14:40 スライド上映 佐久間 聡「**南西諸島両生爬虫類観察紀行(奄美大島編)**」
- 14:50 休憩
- 15:00 報告 東京都多摩各地のサンショウウオ類の繁殖状況に係わる近況
 - 1. 塩谷暢生(トウキョウサンショウウオを守る由木の会)「**多摩丘陵におけるトウキョウサンショウウオ絶滅への道?**」
 - 2. 原島真二「**狭山丘陵：1998年の分布調査とその後の定点調査**」
 - 3. 磨田孝二(東京都町田市)「**町田市の一谷戸におけるアカハライモリの生息状況と保全の試み**」
 - 4. 御手洗 望(青梅自然誌研究グループ)「**青梅市加治丘陵におけるトウキョウサンショウウオの生息状況**」
- 16:20 連絡・後片付けなど
- 閉会(閉会後に懇親会を予定しております。)



両生類・爬虫類における外来生物問題

戸田光彦（自然環境研究センター）

外来生物とは、人によってもともとの分布域の外に持ち込まれた生物を指す。北米原産のアライグマやウシガエル、オオクチバスは日本に持ち込まれて定着し、外来生物となっている。外来生物には、海外からもたらされたものだけでなく、国内の分布域外から持ち込まれたもの（国内外来生物）も含まれる。近年、外来生物の問題が世界的に注目され、マスコミなどでもよく取り上げられている。2005年には、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（通称・外来生物法）が施行され、現在までに83種類の特定外来生物が指定されている。ここでは、日本で外来生物となっている両生類・爬虫類に焦点を当てて、その概要を解説する。

日本では、およそ15種の外来両生類と、20種の外来爬虫類が確認されている。オオヒキガエル、カミツキガメ、アカミミガメ、タイワンハブなど、海外から持ち込まれて定着し、生態系に大きな影響を与えているものが含まれている。一方、たくさんの島嶼がからなる日本では国内外来生物も多く、両生類と爬虫類を合わせて20種以上に上る。本州から北海道に持ち込まれたツチガエルやトノサマガエル、本州から伊豆諸島に持ち込まれたモリアオガエルやアズマヒキガエル、西日本から東日本に持ち込まれたヌマガエル、奄美から伊豆諸島に持ち込まれたアマミオガエル、八重山諸島の中でカエルがいなかった島に導入されたヒメアマガエルなど、あまり知られていない例が多数ある。

外来生物問題への対処として、第一に、これ以上新たな外来生物を持ち込まないことが重要である。これまでの外来生物がたどった歴史をみても、少数の個体を気軽に、または無意識に持ち込んで放した結果、増殖して取り返しのつかない状況をもたらしている。一方、すでに定着している種の場合、生態系などに与える被害が特に大きいものは排除の必要がある。特定外来生物に指定されているものが11種の両生類・爬虫類のうち、オオヒキガエル、グリーンアノール、カミツキガメ、タイワンハブなどについては行政による排除事業が行われている。

以上のような外来生物問題において、当シンポジウムの主役である有尾両生類はほとんど登場しない。国内では、サンショウウオやイモリの定着例はわずかししか知られていないし、世界的に見てもヨーロッパ産のイモリ類などで少数の定着例が報告されているに過ぎない。最後に、有尾両生類が外来生物となった事例に触れて、なぜその例が少ないのかを考えてみたい。

カスミサンショウウオの食性

渡部 祐子（東京都大田区）

カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* は西南日本に広く分布する止水性サンショウウオです。本種の成体は、ふだんは丘陵地などの林床の倒木・落ち葉・石下・浅い土壌中などに潜っており、夜間に行動すると言われています。成体・幼体ともに地表性の昆虫やクモ、ミズなどを食べているといわれていますが、その詳細はほとんど分かっていません。

カスミサンショウウオにとって、採餌活動は繁殖とならんでもっとも重要な活動のひとつと考えられます。しかし東アジアを中心に分布するサンショウウオ属の食性については、本研究で対象としているカスミサンショウウオやトウキョウサンショウウオで調べられてはいるものの、断片的な情報にとどまっています。

そこでカスミサンショウウオの陸上における食性を、年間を通した胃内容物の分析によって明らかにしようと試みました。一つ目は成長段階によってカスミサンショウウオの食性は変化するのか、二つ目はカスミサンショウウオの食性は季節によって変化するのか、またその動きはオスとメスとでは違うのかということを調べました。



調査は、京都市内に半自然状態で残された、面積約 1000m² の緑地の中にある人工池の周辺で行いました。調査地での繁殖期は 12 月半ばから 4 月の終わりぐらいまで続き、ピークは 1～3 月です。2005 年の繁殖期には 1000 個体近い成体が捕獲されました。これに未成熟個体も合わせるとかなりの数のサンショウウオがこの緑地に生息していることとなります。そして野外観察により、サンショウウオは繁殖場所付近でよく確認されたので人工池から約 20m の範囲で調査を行いました。

食性を調べるための陸上個体の調査は 2004 年 5 月から 2005 年 11 月までの昼間の時間に行いました。調査しているカスミサンショウウオには繁殖期に個体識別のためにマイクロチップを皮下に注入しています。

サンショウウオが生息している場所でチップ読みとり機を使うとある程度サンショウウオがいる場所をみつけることができます。そういった場所を見つけ、落ち葉を取り除いたり、少し地面を掘ってみると、サンショウウオが見つかります。こうすることによって生息地の環境破壊を最小限にとどめながらサンショウウオを見つけ出すことができました。

胃内容物と土壤動物は大体目レベルまで同定し、長さ、幅、高さを測って半楕円体や楕円柱に近似してその体積を計算しました。

合計 759 個体のサンショウウオから 1716 個の餌が検出されました。検出された胃内容物は節足、環形、軟体、線型の 4 動物門から成る無脊椎動物が総数の 85%、総体積の 93% を占めました。ただし線型動物門の線虫綱はサンショウウオの胃に寄生していたものの可能性があります。その他にサンショウウオ自身の脱皮殻、枯れ葉や水草などの植物体、泥の固まりや小石などがみられました。

節足動物門は蛛型、甲殻、倍脚、唇脚、昆虫の 5 綱を含み、捕食されていた餌総数の 77%、総体積の 71% を占めました。中でもダンゴムシやワラジムシの仲間は餌総数、餌総体積ともに餌中で最も多くの割合を占めました。最も体積が大きかった餌はミズ類で最も体積が小さかった餌はダニ類でした。そしてサンショウウオのいた場所で見つかった土壤動物で最も数が多かったのはダニ類で、最も合計体積が大きかったのはダンゴムシやワラジムシの仲間でした。

＜成長に伴う食性の変化＞

胃内容物を調べたサンショウウオを成体の雄と雌、当歳幼体、その他の 4 つのグループに分け、餌をたべていた個

体の割合、個体当たりの平均餌数、個体当たりの平均餌体積、よく見られた餌メニューについて比較しました。

餌を食べていた個体の割合は当歳幼体が他のものより有意に高く、個体当たりの平均餌数でも当歳幼体が最も高くなりました。上陸したばかりの幼体は成長のために成体より活発に採餌を行っていると考えられました。しかし個体当たりの餌体積は幼体が最も小さくなりました。

よく見られた餌動物は雄と雌の数では等脚目と倍脚目（ヤスデ類）が多く、体積では等脚目と貧毛類が大きいという結果になり、当歳幼体の数では等脚目とダニ類が多く、体積では等脚目と革翅目が大きいという結果になりました。成体幼体とも最もよく食べられていた等脚目の体長とサンショウウオの体長の関係を調べると、サンショウウオが大きくなるにつれ食べられていた等脚目の最大体長も大きくなりましたが、最小体長はサンショウウオが大きくなっても変わりませんでした。幼体は体サイズに制限され、大きい餌が食べられませんが、ダニ類のような小さい餌をたくさん食べるといった戦略を持っていることが考えられます。サンショウウオが成長するに従って口幅も大きくなり、利用可能な餌の範囲が広がりますが、必ずしも大きな餌を選択して食べているのではないということがわかりました。

<性別に伴う食性の変化>

雌雄の食性の季節変化を調べました。摂食率・餌数・体積は雌雄ともに2004年と2005年を比較してもほとんど差が見られなかったのですべて2年分のデータを平均して示しました。オスは12,1月に摂食率が下がる傾向になり、2月になると胃内容物が検出された個体は15個体中皆無となりました。メスでは1,2月に摂食率が下がる傾向になりましたが、全ての個体が胃内容物を持たない月はありませんでした。なお、雌雄の摂食率の差をみると12月・2月・3月に雌が雄より高いという結果になりました。

サンショウウオは毎月1個体あたりいくつかの餌を食べていたのか、胃内容物があつた個体の平均餌数を示しました。雌雄ともに1月と2月に餌の数が少なくなる傾向にありました。

捕食されていた餌体積は、雄では12・1・2月、雌では1,2月に小さくなる傾向にありました。餌体積の最大値は雄では3から5月にかけて徐々に増加し5月に最も大きくなりましたが、雌では2～3月に急激に増加しました。

3月の雌の個体当たり餌体積の範囲が非常に大きいことに注目して、この月に得られた雌を産卵前と産卵後に分けて個体当たりの餌数と体積を調べると、個体当たり餌数には産卵前後で差が見られませんでした。個体当たり餌体積は産卵後の個体で産卵前の個体より大きくなることわかりました。産卵前の個体は小型のトビムシ類を多く捕食していたのに対し、産卵後の個体はミミズ類など体積の大きい餌種を多く捕食していました。

餌量の春季における雌雄のピークのずれはこのサンショウウオの繁殖生態の差にあると思われます。すなわち雄は水の中に長く留まって雌を待つのにに対して、雌は産卵後ただちに陸に上がって餌を採り始めていることが性差をもたらす要因だと考えました。さらに産卵後のメスは土壌動物中に少ないにも関わらずミミズのような大型の餌を食べていました。産卵後のメスは卵を排出したために、胃の中に取り込むことのできる餌量が増加することに加え、自身の成長や次の卵を作るエネルギーを蓄えるために積極的に大きな餌を探している可能性があります。

まとめ

今回の調査によって半自然状態の条件下に移植された後、そこに定着し増殖しているカスミサンショウウオの陸上活動時における餌内容の概要が明らかになりました。これまでの研究報告と同様に、等脚目が本調査地のカスミサンショウウオにとって重要な餌資源であることがわかりました。また、カスミサンショウウオの食性は成長段階や性別によって異なることがわかりました。

今回調査した個体群は完全な自然状態ではありませんが、カスミサンショウウオの食性の一部が明らかになりました。今後、様々な個体群を調査することによって、より明らかになっていくことを願います。

以上

多摩丘陵におけるトウキョウサンショウウオ絶滅への道？

塩谷 暢生（トウキョウサンショウウオを守る由木の会）

トウキョウサンショウウオの生存に最も重要なのは、安心して産卵できる水場（止水環境）であるが、多摩丘陵においては、産卵地の止水環境の消滅あるいは悪化に歯止めがかからない状況にある。

多摩丘陵の生息地は日野市と八王子市の一部に限定されているが、このうち日野市の生息地は生息記録さえ残されないまま、1960年代半ばから始まった住宅開発により産卵場所の谷戸は埋められ、殆どが消滅したものと推定される。現在の生息地は市街地の中にある個人屋敷を中心とした狭い場所数ヶ所だけとなり、しかも離れ小島のように完全に分断されてしまった。せつかく残った産卵地も、手入れ不足により湧水産卵池が消滅したと思われるものやアメリカザリガニの増殖等により存続の危ぶまれるものが見られるようだ。

八王子市の水場も開発により消滅したものがあるようだが、日野市ほどではない。これは、住宅開発などが日野市より遅れているためでもある。残された生息地の中には湧水による止水環境の悪化しているものも多くみられ、また、住宅開発はこれからが本番なので安心はできない。現に2006年、トウキョウサンショウウオの生息する谷戸が一つ埋められ消滅した。このままでは日野市と同じ道を歩む危険がある。

1 多摩丘陵におけるトウキョウサンショウウオの生息状況

- ・ 範囲は、東京の高尾山東側から横浜市南部の円海山まで、面積は約300km²。別名・イルカ丘陵
- ・ 生息地は丘陵北端部の日野市と八王子市のみ（1998年）。そこには湧水の悪化と住宅等開発の波が。

絶滅へのステップ VS 多摩丘陵における生息記録

第1段階：住宅開発	1960	58年 金井郁夫氏 日野市の程久保と南平で現認
	65	62年頃 金井氏本格調査開始。日野市の調査は後回しに。 65年頃 金井氏未調査のまま日野市の生息谷戸ほぼ消滅、
第2段階：谷戸田耕作放棄	70	生息地は局所的に。 72年 金井氏 八王子市の生息を初めて確認
	75	74年 金井氏著作発行 (トウキョウサンショウウオ・生活の神秘を探る)
第3段階：不用意な工事	80	78年 第2回自然環境保全基礎調査・両生類1978 (データは全て金井氏記録。日野4ヶ所、八王子5ヶ所) (この後、98年まで調査記録がない)
	85	
第4段階：水場悪化	90	96年8月 トウキョウサンショウウオを守る由木の会設立 12月 金井氏死亡
	2000	98年 トウキョウサンショウウオ研究会一斉調査 99年 第1回トウキョウサンショウウオシンポジウム開催
	2007	金井氏記録の内、日野市は3ヶ所、八王子は1ヶ所消滅と推定 (3/4) (1/5) 生息地は、日野市3～5、八王子市12程度と推定

2 絶滅へのステップ

第1段階：大規模住宅開発スタート

- ・ 1965年(S40)頃～
- ・ 住宅開発による丘陵(雑木林)・谷戸(湧水)の消失
- ・ 日野市はこれでほぼ全滅。記録されないまま。生息地は離れ小島のように分断。
- ・ 八王子市地区は、宅地開発はまだなかった。

第2段階：谷戸田の耕作放棄

- ・ 1975(S50)年頃～
- ・ 谷戸田の耕作放棄による荒廃
- ・ 産卵場(湧水による止水)の消失

第3段階:遺跡調査等の不用意な工事

- ・ 1985(60)年頃～
- ・ 産卵地(止水)と生息地・水源の所有者が異なる
産卵地は、丘の麓や谷戸の下方の湧水地にある。
- ・ 丘陵を削る……反対側の湧水抜け
- ・ 深い集水樹の設置(遺跡調査)による死亡例
- ・ コンクリート工事(斜面工事)による死亡例

第4段階:産卵環境(止水)悪化

- ・ 2000年(H12)頃～
- ・ 水質悪化とアメリカザリガニの異常増殖
- ・ 不健全な卵の増加と卵の死亡増加。原因は？
- ・ 本格的な多摩ニュータウン工事はこれから始まる
2006年、生息谷戸が一つ、遺跡調査により消滅。



多摩ニュータウン地区 (赤丸は産卵場)

狭山丘陵のトウキョウサンショウウオ ～1998年の分布調査とその後の定点調査～

原島 真二

1. 狭山丘陵はこんなところ

面積等: 東西 11 キロ、南北 4 キロ、最高地点 194m、3500ha(1/3 は開発された)、81.7 万人が暮らす。

貯水池概要: 村山(上)大正 13 年 3 月竣工、村山(下)昭和 2 年 3 月竣工、上・下合計の用地面積は 3.515km²、山口貯水池は昭和 9 年 3 月竣工、用地面積 6.995km²。

2. 調査の概要

調査地点のプロット図(1998 年調査ほか)

- A 東村山市の廻田
- B 東大和市奈良橋ハツ池
- C 東大和市蔵敷の丘陵沿い
- D 武蔵村山市赤坂池
- E 武蔵村山市番太池
- F 武蔵村山市横田
- G 武蔵村山市野山北公園
- H 武蔵村山市岸たんぼ
- I 瑞穂町瑞穂農芸高校西(下図には無し。H のさらに西側)
- J 瑞穂町高根公園東



2006 年調査

3. 分布調査から定点調査へ(卵のう数の変化調査)

○野山北・六道山公園

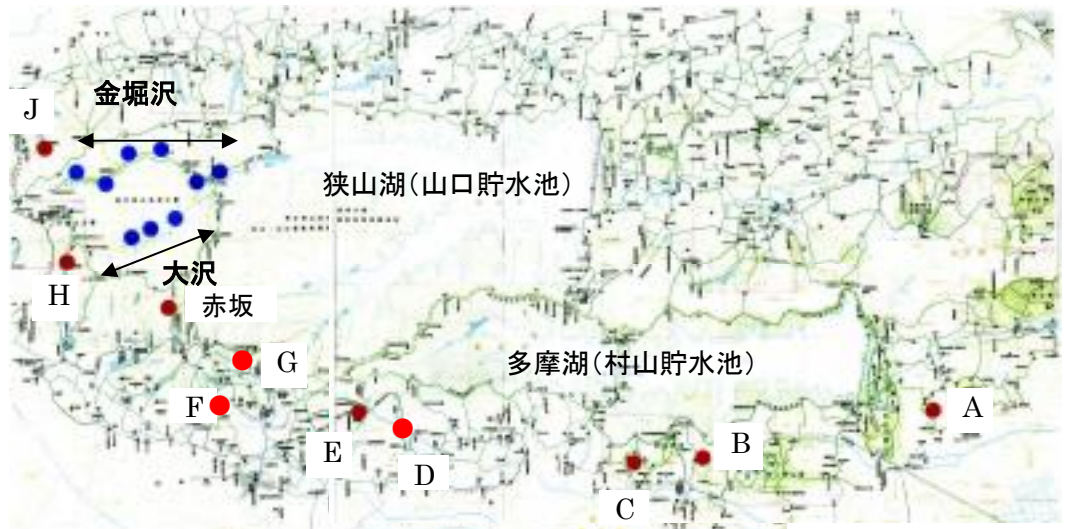
○グラフで見る金堀沢と大沢

○2000 年から 2006 年の変化

- ・ 2000 年 317 卵のう: 雨が少なく、いつまでも寒い。卵のまま死んだものが多い。ヒキガエルの産卵も遅れていた。
- ・ 2001 年 456 卵のう: 7 年間で 3 番目に多い。3 月中旬まで寒波が厳しく、3 月下旬に桜が咲いたにもかかわらず、31 日に雪が降った。雨は少なかった。
- ・ 2002 年 489 卵のう: 一番多い年。2 月以降暖かな日が多く、瑞穂町では 3 月 18 日に桜が咲いた。雨は少なかった。
- ・ 2003 年 472 卵のう: 2 番目に多い。降雪や降雨で水には恵まれた。丸池は、4 月 4 日に降った雨で水かさが多く調査不能だった。
- ・ 2004 年 307 卵のう: 3 月に多少雨が降ったが 4 月以降は乾燥した。川の池が埋没したためか、雨が少なく本流の流れが少なかったためか、本流にも産卵されていた。死滅したものが多い。
- ・ 2005 年 210 卵のう: 雨は少なかったが、横沢入などは少なくなく、狭山丘陵が異常に少なかった。
- ・ 2006 年 169 卵のう: 産卵数がとても減少しているが、原因不明だったが、公園管理人が言うことには、埼玉県のペットショップの人が卵のうを持っていくとのこと。また、地元の人が卵のうを移動しているという。これが事実ならば定点観測をしている意味がなくなってしまう重大問題である。

4. 写真で紹介する調査の様子

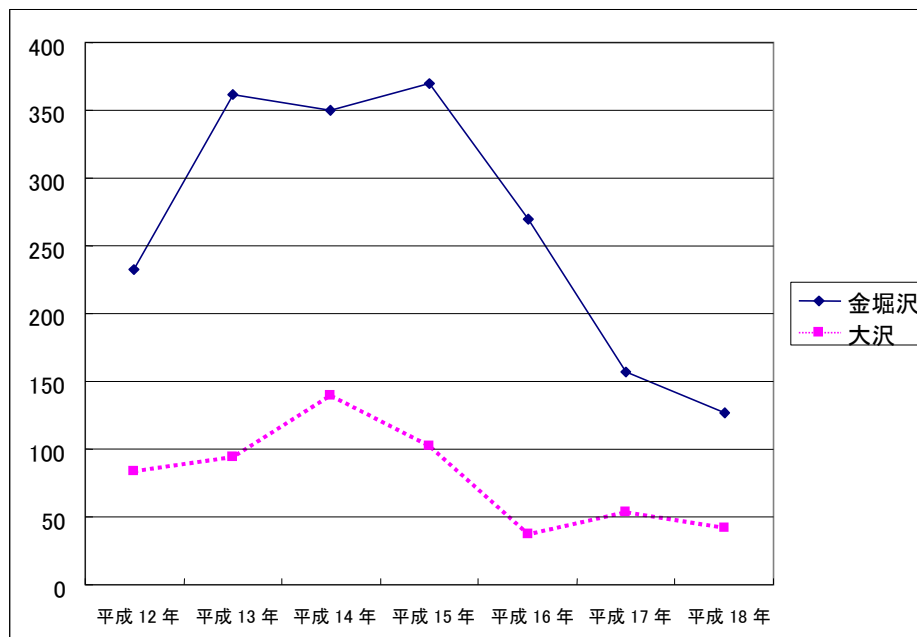
- ・ 丸池
- ・ 道の上
- ・ 川の池
- ・ 入口付近の湿地
- ・ 赤さび池
- ・ 本流に産卵



5. 産卵数の変化

六道山のトウキョウサンショウウオ調査(卵のう)

	2000年 平成12年	2001年 平成13年	2002年 平成14年	2003年 平成15年	2004年 平成16年	2005年 平成17年	2006年 平成18年
金堀沢	233	362	350	370	270	157	127
大沢	84	94	139	102	37	53	42
合計	317	456	489	472	307	210	169



青梅市加治丘陵におけるトウキョウサンショウウオの生息状況

御手洗 望(青梅自然誌研究グループ)

1. 加治丘陵の概況とこれまでの調査

加治丘陵(霞丘陵ともいう; 図 1.)

地 番: 青梅市黒沢, 小曾木, 木野下, 谷野, 塩船, 吹上, 東青梅, 勝沼, 根ヶ布

標 高: 150~300m

調査対象: 小曾木街道、霞川、永山丘陵、岩蔵街道に囲まれた区域

水 系: 入間川経由荒川水系の3河川—黒沢川, 小布市(こぶいち)川, 霞川

植 生: 尾根部—落葉広葉樹の二次林, スギ・ヒノキ針葉樹植林, アカマツ林, ゴルフ場, 宗教法人施設
谷部—水田, 畑地, 集落, 放棄水田跡地草本植物群落(ヨシ・ツルヨシなど)

既往の調査

金井郁夫氏の調査(金井, 1979 など)

第2回自然環境保全基礎調査(環境庁, 1978 * 金井氏による調査)

1998 年都内トウキョウサンショウウオ一斉調査

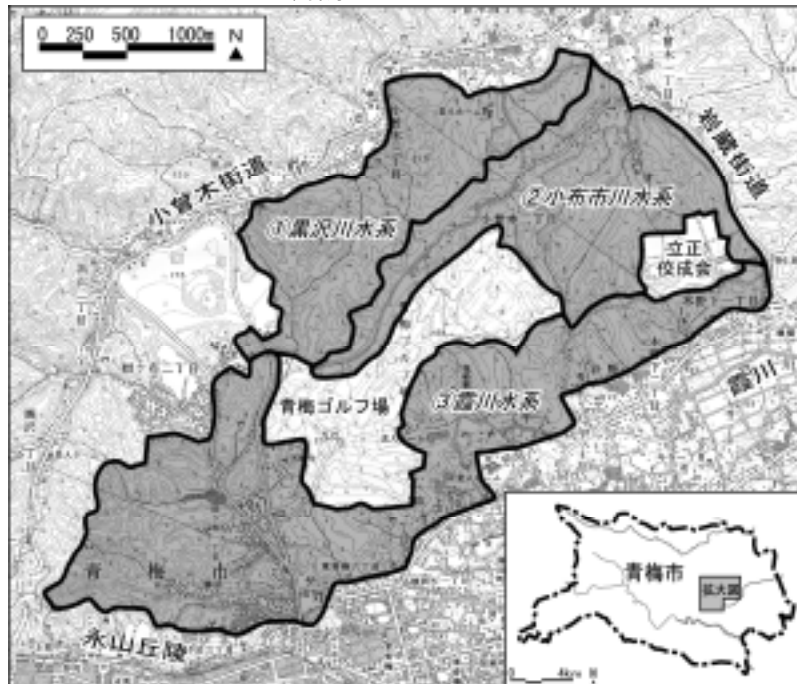


図 1. 調査地

2. 2006 年調査の結果

確認地点について

- ・1998 年の調査時に確認された産卵地のほとんどで卵嚢が確認された。
- ・新たに確認された産卵地もあり、分布域はより広い範囲にわたると考えられる。

確認卵嚢数について

- ・549 個の卵嚢が確認された。そのうち、黒沢川水系で 392 卵嚢(71.4%)、小布市川水系で 142 卵嚢(25.9%)、霞川水系 15 卵嚢(2.7%)確認された(表 1.)。
- ・1998 年の調査では今回の調査対象地域に該当する範囲では 222 卵嚢(加治丘陵個体群 228 卵嚢から笹仁田峠以東の 6 卵嚢を除いた数値)で、確認卵嚢数は大幅に増加した。

表 1. 確認卵嚢数

水 系	2006年卵嚢数		1998年卵嚢数*
	数	割合	
①黒沢川水系	392	71.4%	(加治丘陵個体群の卵嚢数228から笹仁田峠以東の卵嚢数6を除いた数値)
②小布市川水系	142	25.9%	
③霞川水系	15	2.7%	
合計数	549	100.0%	222

*久保田, 1999から引用.

水系毎の確認状況

① 黒沢川水系

丘陵部には谷戸地形があり水路や湿地が多く、卵嚢は広範囲で数多く確認された。

上流側の分布境界は黒沢1丁目の天寧寺坂通より以東であったが、これより西には採石場跡地があり、かつて谷戸地形があった時代にはサンショウウオが生息していた可能性がある。

2005年、2006年連続で哺乳類によると考えられる咬殺死体を確認している(右写真)。



② 小布市川水系

丘陵部の3つの谷戸で広範囲に確認されたが、水系全体では黒沢川水系より確認数は少なかった。

谷戸の湿地は埋め立てられ果樹園や畑地や資材置き場として利用されていたり、徐々に乾燥化して草地や樹林に移したりして、かつてより生息適地が減少していると考えられる。

③ 霞川水系

卵嚢は3つの水系で最も少なく、谷の1ヶ所のみ。卵嚢が確認されたのは丘陵の谷沿いの水路であったが、同様の環境を持つ周辺の谷では確認されなかった。また、水系の源流部(根ヶ布地区・勝沼地区)は谷戸地形を呈しているが、卵嚢は発見できなかった。

この水系では1998年調査では卵嚢が確認されなかったが、今回の調査では新たに産卵場所が1ヶ所確認された。他の2つの水系に比較して分布域が狭いが、小規模な個体群が維持されていると考えられる。また、過去に金井氏(1979)の調査では最上流部の根ヶ布1丁目での記録があることから、分布域が狭まっていると考えられる。

3. 現在の課題と今後の活動

現在の課題

- ・卵嚢が数個しか確認できなかった谷戸もみられ、谷戸単位の個体群の消失が進行しているものと推測される。
- ・湿地の乾燥化による産卵地の消失
- ・アライグマ *Procyon lotor* の捕食の危険性

当グループでは青梅市内の多摩川以北地域の生息状況を把握するため、今春に分布調査を予定している。

謝辞

今回の調査範囲でのトウキョウサンショウウオの生息状況について、西多摩自然フォーラムの久保田繁男氏には多くの情報を提供して頂いた。ここに謝意を表したい。

出典

御手洗望・神森文代・山口孝.2006.青梅市加治丘陵でのトウキョウサンショウウオ *Hynobius tokyoensis* の生息分布.青梅自然誌研究グループ vol.2.

御手洗望・神森文代.2006.トウキョウサンショウウオ *Hynobius tokyoensis* の産卵地での咬殺死体の確認.青梅自然誌研究グループ vol.1.

引用・参考文献

草野保・川上洋一.1999.トウキョウサンショウウオは生き残れるか?—東京都多摩地区における生息状況調査報告書—トウキョウサンショウウオ研究会.東京.69pp.

久保田繁男.1999.加治丘陵のトウキョウサンショウウオ.トウキョウサンショウウオは生き残れるか?—東京都多摩地区における生息状況調査報告書—トウキョウサンショウウオ研究会.東京.pp.44-45.

金田正人.2006.アライグマがトウキョウサンショウウオ等に与える影響.第1回関東地域アライグマ防除モデル事業調査検討会 参考資料3.関東地方環境事務所.埼玉県.

町田市の一谷戸におけるアカハライモリの生息状況と保全の試み

磨田孝二（東京都町田市）

【まちだの谷戸について】

三多摩地域の中では「南多摩」、その南端に位置する町田市は、一部を除き多摩川水系の外側にあります。ほぼ全域が鶴見川、境川水系であり、この2河川の源流ランドスケープとして豊かな谷戸地形を内包しているのです。北部丘陵とよぶ谷戸群を中心に緑塊が連なり、東京都が行った多摩全域の谷戸調査では、Aランク評価の谷戸5つのうち4つが町田市から選定されました。すでに保全された市内の谷戸では、地権者が組合を結成した少数精鋭型のケース（図師小野路歴史環境保全地域）や、市民参加型のケースなど、さまざまなかたちで里山環境の回復作業が進められています。しかし開発の波は、今もとどまることはありません。

【調査地について】

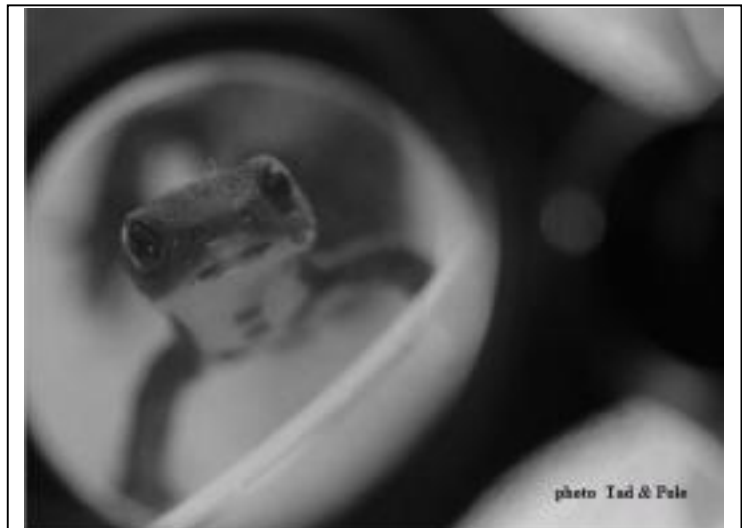
町田市内に現存する谷戸の多くは休耕状態にあり、畑地転用なども進み、田んぼとしての管理割合は年々低下しています。その中で、支流の源流部としては珍しく、営農により手入れされ昔ながらの谷戸田の形状を残した小さな谷戸がありました。通年湛水の湿地でもあったその場所は、下流部の開発から追われた生き物たちのシェルターとなり、生物多様性を現在まで維持してきた、きわめて希少な環境でした。残念ながら「緑の基本計画」を含め、その価値や重要性が評価されたことはなく、配慮もないままに開発は許可され消失することになりました。そこが今回、イモリの保全を試みている谷戸になります。

【経緯について】

開発計画を知った時点で、すでに許可から1年以上経過していました。そのうえ本工事着工も未定で、用地も買収前でした。日本経済全体が低迷していた当時、撤退を含めた緑地保全のわずかな可能性を願いながら、保全の根拠になりえる情報を求めて、トウキョウサンショウウオ同様、都の絶滅危惧Bランクの生きものであるイモリの生息状況について、個人的に調査を行うことにしました。町田市内に生息する5科11種の両生類のうち、イモリが唯一の有尾両生類で、トウキョウサンショウウオは確認されていません。

【報告内容について】

調査によってイモリの繁殖など確認することができましたが、状況を変える画期的な情報とはなりません。間もなく工事は着工されたため、一時避難のための救出を行いました。現在工事は中断されています。初期調査の結果や、工事後の救出について、また工事中断をはさむ3年間の回帰状況を含めた動態について、開発影響下におかれたイモリ個体群の生息状況を報告します。さらに成体移植やボトムアップの経過など、保全の取り組みについても報告します。



写真：工事が始まる前に個体識別した最後の女の子で、まだ救出できていません。